

寺だより

23/10/30
第112号

真宗大谷派
青龍山西光寺
珠洲市正院町正院

第一回本堂修繕実行委員会報告

傾いた本堂の建て起こし、耐震工事
宮殿修理、仏さまの修理、仏具の修理
等を行うことを正式に決定しました。
工事期間は、令和五年十二月十五日
から五月三十一日までです。
修理修繕費用概算三千万円の調達に
ついては、再度審議し護持委員会に提
案します。

*クラウドファンディングの立ち上
げですが、現在の所ハードルが高
く難航しています。

珠洲市文化財

西光寺蔵「御絵伝」について

『親鸞聖人伝絵』という絵巻物語り
があります。この絵巻物語りは、親鸞
聖人の曾孫である覚如上人が制作され
たもので、聖人の生涯における主要な
出来事が、文章と絵で表されています。
文章は『御伝鈔』(ごでんしょう)、絵
を『御絵伝』(ごえでん)といいます。

浄土真宗の寺院では、最重要行事で
ある「報恩講」にて、『御絵伝』を余間
(参詣席から向かって左)におかけし
『御伝鈔』を拝読します。



御絵伝 令和4年西光寺報恩講

この御絵伝は蓮如上人が、光徳寺(も
と河北郡倉月庄木越村、現在七尾市)
に下付されたものですが、のち、寛永
三年(一六二六年・三八一年前)に西
光寺に移されたことを第十三代門主宣
如の加筆によって知ることができます。
西光寺蔵の御絵伝は石川県に現在ま
で残っている文明期以前の親鸞絵伝四
例のうちの一つで、珠洲市の文化財に
指定されています。
現在は、長い間使用してきた汚れや
破損があるので、これ以上の劣化を防
ぐために新しい御絵伝を使用していま
す。

西光寺蔵の「御
絵伝」は、蓮如時
代の文明三年(一
四七一年・五五二
年前)本願寺より
下付されたもの
です。裏書に
釈蓮如(花押)
文明三歳六月廿
五日
とあります。

報恩講のご案内

十一月六日(月)

一時より 速夜のお勤め

法話

十一月七日(火)

一時より 大速夜のお勤め

法話

『御伝鈔』拝読

十一月八日(水)

一時より 結願日中のお勤め

法話

法話 諸岡 敏先生(輪島市門前)

◎ 地震被害で本堂が使えないので、お勤めは、広間で行います。

◎ お斎(オコサマ)は、会場等の都合で今年も中止させていただきます。

◎ 本年度報恩講のお参りは、三日間とも午後一時からですので、ローソク料等の受付も午後からとなります。よろしく願います。

西光寺護持委員会

報恩講 お参りのしおり

11月6日(月) 午後一時から

◆遠夜のお勤めと法話

11月7日(火) 午後一時から

◆大遠夜のお勤めと法話

両日とも、お勤めは「正信偈・真四句目下」です。緑の本・同朋唱和勤行集を使います。お持ちの方はご持参下さい。



◆法話終了後『御伝鈔』拝読

例年なら、本堂を暗くし、袴を着

けた二人の門徒さんが大きな朱ローソクの灯りをささげて、その後ろには、『御伝鈔』が入った箱を持って門徒さんで「練り出し」を行います。今年も行わず直接御伝鈔を拝読します。



御伝鈔拝読

お勤めは赤本『正信偈・同朋唱和』を皆さんと共に勤めます。

和讃は、黄色の本。「西光寺報恩講八日結願日中念仏・和讃」を使います。



* 緑の本・赤本・黄色の本は、広間に用意してあります。

○お供えについて

今年、広間で縮小して報恩講を行いますので、全門徒さんへのお供え配布は行いませんので、ご了承下さい。最終日お参りの方には、お供えをお配りします。

○おかざり米並びに野菜代について

例年春のお講と報恩講のお講のおかざり米並びに野菜代として五〇〇円集めさせていただいていますが、本年度は集金しませんので、ご承知置き下さい。

お取越しの案内

今年も10月中旬より、岩坂町内を皮切りに、ご門徒のお宅へ一軒一軒お参りする在家報恩講(通称おとりこし)

に回っています。

■ お内仏を掃除しましょう。仏具も磨きましよう。

■ 年一回のお取越です、お仏壇のお掃除は念入りに行いましょう。

■ 真鍮製品の輪灯や仏具は真鍮磨きでピカピカになるまで磨きましよう。これを古来「おみがき」と言つて家族で行う大切な準備でした。

■ ローソクはできれば赤の和ローソクを用意下さい。無ければ白の和ローソクでも洋ローソクでも結構です。打敷をかけ、おもち・お菓子、果



打敷

今年最後の法和会開かれる

10月10日(金)、今年度最後の法和会が開かれました。

「そんなとくか 人間のものさしうそ かまことか 仏さまのものさし」というテーマでお話しさせていただきました。

「桜井俊彦氏著書の『やわらか子ども法話』の中に、『十円玉の話』というものがあります。

「知的障害の子どもたちが入っているある施設で働いていたおじさんが、ひとりの子どもを呼んできて、財布から六枚の硬貨を出して言いました。これは、一円玉、五円玉、十円玉、五十円玉、百円玉、五百円玉だね。好きなものをあげるから、どれか一つを選んでごらん、と。」

おじさんは、五百円玉を選ぶを思っていたのですが、その子を選んだのは十円玉でした。

おじさんは、尋ねました。

どうして、十円玉を選んだの？

すると、その子はこう言いました。

これで、お母さんの声が聞けるから、と。

施設にある公衆電話は、十円玉でしかかけられないものでした。

その公衆電話で、お母さんの声を聞くことを、その子は、一番の楽しみにしていたのでした。」



法和会 10月10日

「わたしたちは、お金の価値を、金額が大きいか、少ないか、

で決めています。でも、そのお金の価値では代えられない、心の価値をいうものがあります。」と、著書の桜井俊彦さんは、おっしゃっています。

五百円玉を選ぶうとするのは、わたしたち「人間のものさし」です。

損か得かという比較の中でしか、はかれないものさしを持って生きています。

しかし、十円玉にその意味を見つけるといふ物差しは、「仏さまのものさし」です。」

そして、法話の最後に千手観音のお話をさせていただきました。

「私たちは、千手観音のように生きればいいんです。

千手観音像には、たいてい四十二本の手が付いているようですが、どの手も、いろんな向きに伸びて、いろんなことをしていますね。

ですが、真ん中の二本の手だけは、身体の中で合掌しています。

どう生きてもいいし、何をしてもいいんです。四十本の手は。

『そんなとくか 人間のものさし』をなくすことが出来ない私を、いつも照らして破ってくださるはたらき『うそかまことか 仏さまのものさし』に出

会っていたら、また本当に頭が下がるということが一回でも自分の中にあつたならば、そのことが大事です。」

どうぞお寺に足を運んで、「仏さまのものさし」に耳を傾けてください。

来年も、4月より10月まで月一回、法和会を開きます。お待ちしております。

今年度は西光寺の宗派経常費御依頼並びに教区費につきまして、奥能登地震による被害状況に鑑み、免除となりました。

私たちの宗門・真宗大谷派（東本願寺）は、ご門徒の皆さまからの懇志で成り立っています。

毎年、本山より門徒数に応じて各お寺に宗派運営費が割り当てられます。これを「本山上がり」とよんでいます。

これまで西光寺は、ご門徒の皆さまのご理解と御協力によって割り当てられた本山上がりを毎年完納することができております。

誠に有り難いことと感謝しております。

今年度は本山上がりを集めません

令和五年度宗派経常費御依頼額 ○円

令和五年度能登教区費 ○円

なぜ頭を下げるの？

ある家での法華のお話です。

お経を読み御文を拝読し終わった時、若い人が隣りに座っていた年配の人に問いかけました。

「お経が終わってから、何でみんな頭を下げたの？」

「御文さんは、頭を下げて聞くもんじゃないや」

「御文さんて、なんか知らんけど、頭を畳にすりつけるようにして聞かないかんのか？ 本当は足のしびれをとるためにやつとるのじゃないの？」

「何を言つとる。昔からこうやつとお参りすることになつとるんや」

御文さんというのは、親鸞さんから数えて八代目の蓮如さんが、真宗の教えを正しく受けとめてほしいという願いから、各地にいる真宗門徒の方たちに書かれたお手紙です。

この御文さんを、私達の先祖は大切に聞いてきました。

もちろん、大切に聞いてきたわけですが、頭を畳にすりつける姿勢で聞くのではなく、



お文箱

軽く頭礼をする程度に頭を下げて聞いてきました。

人間の知恵と仏さまの智慧

人間の知恵とは、人間の方から未知なるものを学び、覚え、理解することであり、知識、教養、学問の世界です。

そして知恵がつけばつくほど偉くなり、賢くなり頭が上がってきます。

しかし仏さまの智慧とは、仏さまの方から私を照らし、めざめさせ、心の闇を破つてくださる働きですから、仏さまの智慧に遇えば遇うほど、私の愚かさ、恥ずかしさ、罪業の深さに気づかされ、頭が下がるばかりです。

人間は知恵がつけば偉くなり、賢くなるので頭が上がり、仏法を聞く耳がなくなつてきます。素直に仏さまの教えに耳が傾けられなくなり、頭を下げないと、声は聞こえても、教えは聞こえません。

「私達は何を生きるより所とするのか」を仏法に開き、自分の生きる道を点検することは大事なことだと思えます。

どうぞお寺のお参りにご参詣下さい。



おんくん(らんおんくん)本願寺公式キャラクター

II 編集後記 II

あたりまえの幸せを
あたりまえだから気づかない
あたりまえの幸せは
失くした人だけが知っている

作者は長年、股関節症という病気をわずらい、数度の手術を重ねている方です。(股関節症とは、股関節がしだいに壊れてゆき、しまいには歩くことができなくなってしまう症状だそうです。)

歩く、走る、行きたい所へ行ける。それはできる人にとっては何でもない「あたりまえ」のことです。あたりまえであるが故に、それが大きな幸せであり喜びであることに気づきません。それどころか眼を向けようとさえしていません。

考えてみれば、私たちはどれほど多くのことを「あたりまえ」にしていることでしょうか。

歳を重ねることで若さを知り、病に伏して健康のありがたさを知る。私たちは失って初めて失ったものの大切さを知るようです。

今 座骨神経痛で痛み止めの薬を飲みながらお取越に回っていますが、あらためてこの詩を味わっています。

当たり前の日常は本当は有り難いことだらけです。
南無阿弥陀仏